

黒毛和種子牛でみられた先天性再生不良性貧血

淡路基幹家畜診療所 三原診療所

○久野尚之 是枝明博 黒岩武信 宮本義隆

玉井 登 曾賀久征 喜田利明

胎生期の造血は肝臓のほか脾臓やリンパ節で行われる。出生後は、完全に骨髄が造血器の中心となり骨髄で成熟した赤血球、白血球、血小板が血液中に放出される。赤血球の寿命は3ヵ月齢の子牛で約55日、好中球は数～数十時間、リンパ球は長いもので2～3ヵ月、血小板は2～10日といわれている。再生不良性貧血は骨髄中の造血幹細胞が何らかの原因で障害を受け、これらの成分が補給されないことにより発症する。

材料および方法

発症牛 2009年7月27日生まれの子牛で種雄牛は福広土井、母牛の父は鶴丸土井、母牛の祖父は照長土井であった。母牛は2000年3月6日生まれの自家産牛であり、発症牛は7産目の産子で在胎287日であった。

臨床経過 2009年8月18日、アブ等に刺された部位から出血が止まりにくく元気消失するため求診があり、同日血液検査（一般、生化学、遺伝子検査）を実施した。

8月25日、衰弱し起立不能となったため病性鑑定した。

遺伝子検査 凝固第11因子、凝固第13因子、チェディアックヒガシ症候群

結 果

- ① 血液検査 初診時と剖検時のRBCはそれぞれ $318, 189 \times 10^4 / \mu\text{L}$ 、WBCは1600, 1600/ μL 、Hbは4.1, 2.2g/dL、Htは12.6, 6.9%、PLTは $1.2, 0.7 \times 10^4 / \mu\text{L}$ であった。初診時においてPTは34.3sec、APTTは $>75\text{sec}$ 、フィブリノーゲンは714mg/dLであった。
- ② 剖検所見および病理組織検査 腰背部、肋部の皮下出血、心外・内膜面の出血、第3胃葉の出血・糜爛壊死、肺および脳の点状出血、脾臓皮膜下の出血など多発性出血がみられ、併せて第1・第4胃潰瘍と肝臓の褪色もみられた。病理組織検査では、胸骨髄の低形成がみられ造血領域の脂肪細胞による置換と造血細胞の減数が認められた。また、繊維索性肺炎と肝細胞の空胞変性もみられた。
- ③ 遺伝子検査 3項目いずれも正常であった。

考 察

本症例は出生後1ヵ月齢で発症し、血液検査において汎血球減少症を呈し、さらに病理組織検査において骨髄造血細胞の減少を認めたことから先天性再生不良性貧血と診断した。

また、出血傾向がみられたことは血小板の著しい減少が主因と考えられ、APTTの延長につながったものと思われた。ヒトでの類似疾患は常染色体劣性の遺伝性疾患であり、骨髄の低形成に加えて骨格系の奇形などがみられることが多い。今後、同様の症例が発生する可能性は否定できないため、注意深くデータの集積が必要と思われた。